

栽培漁業技術開発事業（要約）

（ハマフエフキ、八重山海域）

與那嶺盛次*、多和田真周、大城信弘、友利昭之助**

本研究の詳細は昭和60年度栽培漁業技術開発事業調査報告書（沖水試資料No.90）において報告したので、ここでは概要のみを記す。

1. 種苗生産

60kl水槽2面を使用して、平均全長12.8～13.0mmサイズを85,000尾生産し、約60,000尾を沖出した。歩留りは2.1と5.8%であった。

平均全長8.9mmの稚魚を供試して、餌料種類別の飼育試験を実施した結果、歩留り、成長、活力ともクロレラ強化培養ワムシ区が良好な成績を示した。

2. 中間育成

(1) 当支場で種苗生産した平均全長12.8～18.0mmの種苗62,402尾を用いて、海面小割網生簀4面で中間育成を実施したが、昭和60年8月22日台風11号による生簀破損により放流直前の魚が全て逸散した。その時の魚の大きさと尾数は尾叉長100mm、12,000尾。尾叉長50mm、1,000尾であった。

(2) 中間育成の歩留りは約12.5～62.4%であった。沖出しサイズが13mm前後と小型であったため、沖出し直後の強風などの天候に左右され、歩留りにかなりの差がでた。平均全長18.0mmの沖出し魚は歩留りが高かった。

3. 放流と追跡

(1) 本年度の放流は8月22日の台風により放流直前の魚が逸散したため無標識放流とした。放流場所は川平湾中央部であった。

(2) 川平湾の放流魚は放流約1年後でも、放流地点から1.0km以内で再捕された。また、人工種苗を使用した放流魚も天然魚と同様に、水温の低下によると思われる浅深移動を行なうことがわかった。名蔵湾での本年の再捕はなかった。

(3) 川平湾の放流魚は尾叉長105～113mm、体重25～29gの魚体が放流約1年後に尾叉長230mm前後、体重200g前後になった。成長は夏期に良好であった。

(4) 川平湾の放流魚は腹部に蓄積された脂肪が放流約1カ月後にはなくなっていた。その間は空胃であった。餌料生物は短尾類、腹足類、魚類、斧足類、多毛類、端脚類、線虫類、貝虫類で天然魚とほぼ同様であった。

(5) 腹鰭抜去標識は標識魚飼育試験の結果、小型魚（平均尾叉長57.0mm）でも有効であった。

* 現在の所属：水産業改良普及所

** 現在の所属：栽培漁業センター